

ムラブリ語の数詞*

伊藤雄馬

京都大学／日本学術振興会

キーワード：ムラブリ語，数詞，オーストロアジア語族，クム語派

1 はじめに

ムラブリ語¹の数詞の用法は多岐にわたる。その用法は、大きく分けて数量詞用法と非数量詞用法があるが、後者のほとんどは未記述である。本稿では、ムラブリ語の数詞の用法について、数量詞用法と非数量詞用法の両方について記述する。なお、「一」から「十」を表す数詞のグロス表記は、数量句用法、非数量句用法に関わらず、一貫して漢数字で提示することとする。

1.1 系統

ムラブリ語は、オーストロアジア語族² (Austroasiatic)、北方モン・クメール諸語 (Northern Mon-Khmer languages)、クム語派 (Khmuic) に分類される (cf. Sidwell 2015)。この分類は、クム語派に属するとされるティン語 (T'in) とムラブリ語の間に、音対応が認められることを根拠の1つとしている (Rischel 2007)。ただし、ムラブリ語は、クム語派内における語彙共有率が低く、他のクム語派と言語特徴を異にすることから、系統について議論の余地を残す (cf. Sidwell 2015: 289)。本稿で取り上げる数詞も、クム語派内で特異とみられる特徴がいくつか存在する。

1.2 変種

Rischel (2007: 30) によれば、ムラブリ語の変種には少なくとも A 変種 (A-Mlabri, α -Mlabri)、B 変種 (B-Mlabri, β -Mlabri)、C 変種 (C-Mlabri, γ -Mlabri, Yumbri) が存在する。ムラブリは「元来」³ 狩猟採集を営み、タイ・ラオス国境の山岳部で遊動生活を送っていた。ラオスでは現在も

* 本研究は JSPS 特別研究員奨励費 25・4309 「北タイの危機言語ムラブリ語のドキュメンテーションとその分析」の助成を一部受けたものである。本稿の執筆にあたっては、長田俊樹氏とバデノック・ネイサン氏から多くの有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表す。当然、本稿にありうべき誤りの責任は全て筆者にある。

¹ ムラブリ語の音素は以下のとおり：[頭子音] /p, p^h, b, [?]b, t, t^h, d, [?]d, c[t̪c̪], j[d̪z̪], k, k^h, g, ʔ; m, ^hm, n, ^hn, ɲ, ^hɲ; r, ^hr, l, ^hl; s, h; w, y[j], [?]w, [?]y[ʔj] / [末子音] /p[p̚], t[t̚], c[c̚], k[k̚], ʔ[ʔ̚]; m[m̚], n[n̚], ɲ[ɲ̚]; r, l[l̚], ^hl̚; e, h; w, y[j] / [母音] /i, e, ε, a, ɔ, o, u, ʊ, ɤ, ʌ/

² ここでいうオーストロアジア語族とは、ムンダ諸語 (Munda languages) とモン・クメール諸語 (Mon-Khmer languages) の両方を含む言語群を指すこととする。

³ 「元来」に括弧を付けたのは、ムラブリが農耕民から狩猟採集民へ再適応 (cultural reversion) した民族である可能性を遺伝学の見地から指摘されているためである (Oota et al. 2005)。

森で生活しているそうだが、タイでは森林破壊とタイ政府の定住化政策により全員が定住しており、賃金労働や小作農をして生活している。以下にムラブリの定住地を地図で示す。定住地の名前は略して示してある。後述する正式名の下線部を参照されたい。

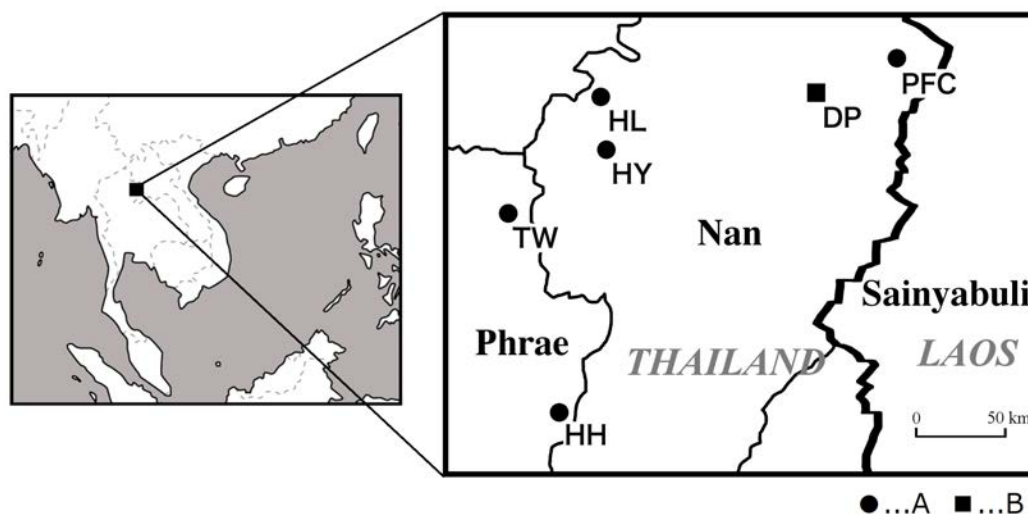


図1 ムラブリの定住地

A 変種は、タイ北部のナン県 (Nan) とプレー県 (Phrae) で話され、筆者の調査によれば話者数約 400 名で、最大の変種である。定住地は、フアイユアック村 (Ban Huai Yuak), フアイホーム村 (Ban Huai Hom), ファイルー村 (Ban Huai Lu), タワ村 (Ban Tha Wa), プーファー開発センター (Phu Fa Development Center) である。筆者の観察では、A 変種話者の全員がムラブリ語を母語とするものと考えられる。ムラブリ語の中で最も調査されている変種であり、語彙・テキストに限ると、Bernatzik (1938) の語彙・表現集 (182 項目) に始まり、Nimmanhaeminda (1963) の語彙集 (66 項目), Egerod (1982) の語彙集 (217 項目), Egerod&Rischel (1987) の語彙集 (1,308 項目), Sakamoto (2005) のテキスト集が存在する。近年では、伊藤 (2014) の文法スケッチ, 伊藤・二文字屋 (2014) のテキスト, Bättscher (2015) の文法スケッチとテキストがある。

B 変種は、Rischel (1995) 以降調査されておらず、存在も確認されてこなかったが (cf. Bättscher 2015: 1004), 2015 年 3 月に行った筆者の調査によって 6 名の話者が確認できた。男性 3 名、女性 3 名である。ただし、筆者が確認した限りでは、実際に話せるのは男性 3 名のみで、女性は数語のみ覚えているか、聞いて理解するに留まる。主な居住地はフモン (Hmong, フモン・ミエン語族) の村であるドーンプライワン村 (Ban Don Praiwan) であり、男性 3 名、女性 1 名が住む。残りの女性 2 名は別のタイ族の村に嫁いでいる。この B 変種は、ムラブリ語の変種で唯一文法書が存在する変種である (Rischel 1995)。

C 変種は、ラオスのサイニャブリ県 (Sainyabuli) に住む集団であり、筆者がサイニャブリ県観光局に問い合わせた情報だと、2013 年の時点で 13 名である。いくつかの調査報告があるが、断片的な資料しかない (cf. Chazée 2001, Rischel 1999)。Rischel (1999) によれば、ムラブリ語の最も古い資料である Bernatzik (1938) の資料は、この C 変種である可能性が最も高い。

本稿では A 変種を主に扱う。提示する資料は断りのない限り、筆者の独自資料である。

2 数詞

2.1 「一」から「十」

ムラブリ語 A 変種 (A-Mlabri) の数詞は、「一」から「十」まで観察されている。その形式を以下の表 1⁴ に挙げる。同時に、ムラブリ語 B 変種⁵ (B-Mlabri: Rischel 1995), ムラブリ語に最も近いとされるティン語⁶ (T'in: Rischel 1997: 285), クム祖語 (PKm: Sidwell 2013), モン・クメール祖語 (PMK: Shorto 2006) の対応すると考えられる数詞も合わせて挙げる。

表 1 数詞「一」から「十」の形式

| | A-Mlabri | B-Mlabri | T'in | PKm | PMK |
|---|-------------------|-------------------|--------------------|-------|-------|
| 一 | məy | məy | muɔj | *moːj | *muːj |
| 二 | bɛr | bɛːr | pia(r) | *baːr | *baːr |
| 三 | pɛʔ | pɛʔ | p ^h ɛʔ | *peʔ | *piʔ |
| 四 | pon | pon | p ^h on | *puən | *puən |
| 五 | t ^h ɣŋ | t ^h ɣŋ | səŋ | *səŋ | *sən |
| 六 | tal | taːl | t ^h uɔl | *tɔl | *tuəl |
| 七 | gul | gul | gul | *guːl | — |
| 八 | tiʔ | tiːʔ | t ^h iʔ | *tiʔ | — |
| 九 | gac | gajh | gat | *kaːj | — |
| 十 | gal | gal | ma tuk | *gal | — |

オーストロアジア語族の数詞については、この語族で最も重要な言語の一つであるクメール語がその数詞に五進法を含むことなどから、古くから関心を持たれ、長い比較研究の歴史を持つ (cf. Diffloth & Zide 1976, Rischel 1997, Sidwell 1999)。ムラブリ語においても比較研究の観点から数詞を分析する必要があるが、本稿では共時的な記述が主な目的であるため、部分的にコメントを加えるに留める。

数詞「五」について、頭子音がムラブリ語は閉鎖音 t^h-であるが、モン・クメール祖語を含め、他は全て摩擦音 s-である。これは、ムラブリ語に s->t^h-という音変化が起こったためである (Rischel 2007: 111)。この s->t^h-という音変化が起きたのは、管見の限り、クム語派内だけでなく、オーストロアジア語族の中でもムラブリ語のみであり、注目に値する。

ムラブリ語の数詞「八」tiʔ は「手」という意味も表す。クム祖語にも「手、前足」を意味す

⁴ 表記を統一するために、一部表記を変えている。例えば、長母音は母音記号の連続で記す研究があったが、長音記号に変えた。

⁵ 数詞「六」については、Rischel (1995) では t^haːl と頭子音が有気音であるが、Rischel (1997: 286) では無気音であること、また筆者自身による調査でも無気音であったため、無気音とした。

⁶ ティン語の「二」に見られる丸括弧は、変種によってはわたり音、ないしは無くなっていることを示している。また「十」に見られる ma は「一」が音声的に弱化したものである。

る*tiʔが再建されていることから、「八」と「手」が同形式である言語がクム語派には多いことが伺える⁷。モン・クメール祖語にも「手」の再建形として*ti:ʔがあるため、もともと「手」を表していた形式*tiʔが、複数の言語において「八」という意味を持つようになったと考えるのが今のところ妥当であろう。しかし、なぜ「手」が「八」を意味するようになったのかは、明らかでない⁸。なお、オーストロアジア語族のムンダ語派においても、tiʔは「手・腕」と数詞の両方を意味する(Zide 1978: 40)。しかし、その表す数は「五」であり、クム語派などとは異なる。

2.1.1 「一」から「十」の数え方

ムラブリ語話者の中で、固有語の数詞の全てを正確に言える者は多くない。多くの話者は言えても「一」と「二」のみで、三以降は言えない。他にも、途中の数詞を抜かして覚えていたり(例えば、「三」を抜かして覚えている)、順番を間違えて覚えていたり(例えば、「四」と「五」の順番が逆転している)する。このような背景から、固有語の数詞を「一」から「十」まで間違えずに言えることは、ムラブリ社会では知的であることを表す。

数詞を数える際は、必ず「一」から始まり、「十」で終わる。途中の数から数え始めることはせず、途中から数えるように要求しても、難しいようである。数えている途中で思い出せなくなった場合も、「一」から数え直される。このことから、「一」から「十」までを一つのまとまりとして覚えていると考えられる。

2.2 「十」より上の数

ムラブリ語の固有語には「十」より上の数詞は存在しない。「十」より上の数を数えるときは、タイ系言語からの借用語を用いる。

ただし、若年層ではムラブリ語の数詞を用いて「十」より上の数を数えようとする向きもある。例えば、11はməy gal məy (一, 十, 一)、35はpeʔ gal t^hɣŋ (三, 十, 五)などである。ただし、この「十」より上をムラブリ語の数詞で表す方法には、話者によって異なることがある。例えば、上の11の例は、ある話者はgal məy (十, 一)が、前述したməy gal məy (一, 十, 一)よりも適切であるという。

また、一部の色彩語彙を用いて数を表すこともできる。例えば、「青、緑」をあらわすbn.liŋは20を表す。同様に、「赤」を表すleŋは100を、「白」を表すbalakは1,000を表す。これらはそれぞれ、タイ紙幣の色と対応している。つまり、タイバーツ紙幣で20バーツが緑、100バーツが赤、1000バーツが白であり、それぞれ色と数がムラブリ語の例と対応している⁹。

⁷ ただし、パラウン語派(Palaungic)やペア語派(Pearic)の言語にも「八」と「手」が同形の言語は見られる。

⁸ 考えられるものとして、指と指の間数は両手で8あること、また、片手の親指を除いた関節の数は8になることである。しかし、これらの数え方がムラブリの間に見られるわけではない。

⁹ この他の色彩語彙に、「黒」p^ha.^ʔdamと「黄」hlɣŋがあるが、そこれらは数を表さない。

3 数詞の用法

数詞の用法として、数量詞用法と非数量詞用法に分けて記述する。

3.1 数量句用法

数詞と類別詞¹⁰で数量句を形成する。語順は数詞、類別詞である。類別詞なしの数詞のみで数量を表す例も観察できる (cf. Bäscher 2015: 1019)。数量句では、タイ系言語から借用した数詞を用いるのが普通である。以下、借用語は<>に入れて表す

- (1) a. luk.ʔəm ber klɔʔ
 飴 二 [類]
 「飴 2 つ」
- b. ʔoh ʔa=ʔday <səŋ>
 1.SG [完]=得る 二
 「2 つもらった」
- c. jak nən <sam> lək
 行く 寝る 三 [類]
 「3 日間寝に行く」

数量句は、名詞句、もしくは動詞句に後続する。

3.1.1 「一」を含む数量句の回避傾向

「1 つ」など、数量が1であることを表すのに、数詞 məy 「一」を伴う数量句の形は、使用可能であるが、あまり用いられないようである。代わりに、接頭辞 do- 「だけ」と数詞「一」による、do-məy 「1 つだけ」を用いるのが最も一般的である¹¹。

- (2) a. luk.ʔəm do-məy
 飴 だけ-一
 「飴 1 つだけ」
- b. hɔuh do-məy
 居る だけ-一
 「1 人だけにいる」

この do-məy という形式は、数量句と同様に、名詞句か動詞句に後続する。

¹⁰ ムラブリ語は類別詞がそれほど発達していない。Rischel (2007: 96–98) では、ムラブリ語の類別詞を 27 種類列挙している。そこで挙げられているほとんどの類別詞は、名詞としても用いられる。

¹¹ なお、この接頭辞 do-が他の数詞、例えば ber 「二」と共起する例は観察されていない。また、接頭辞 do-はタイ語の数詞とは共起しないようである。

3.1.2 「一」を表す mΛ-

数詞 mɔy 「一」を用いた数量句は回避傾向にあり、その代わりに do-mɔy が用いられることを述べたが、他にも mΛ-という形式で数量が1であることを表すこともできる。

mΛ-は類別詞と数量句となつて数量が1であることを表し、この点で数詞 mɔy と性質を同じくする。しかし、単独で現れることはなく、常に類別詞を伴った形で観察される点が、数詞 mɔy と異なる。

また、全ての類別詞に mΛ-が使えるわけではない点も、数詞と異なる。例えば、もっとも頻繁に使われる類別詞 klɔʔ 「個」には mΛ-は共起しない。現時点で mΛ-との共起が確認されているのは、「回数」を表す t^huuu と「本数」を表す t^hl.duu, 「年数」を表す ^hnam との共起が確認されている。

- (3) a. pɣʔ mΛ-t^hl.duu
ある mΛ-[類]
「飴ひとつ」
b. jak mΛ-t^huuu
行く mΛ-[類]
「(もう)一度行く」

なお、mΛ-が「回数」を表す t^huuu と共起した場合、「もう一度」の意味も表しうる。

3.1.3 「同じ」と「違う」に現れる mΛ-

これまでみた、do-「だけ」と mΛ-を組み合わせたとみられる、domΛ-という表現があり、これは後ろに名詞を伴い「同じ」という意味を表す。

- (4) domΛ-buk 「同じ顔」(cf. buk 「顔, 額」)
domΛ-bɔn 「同じ集団」(cf. bɔn 「集団」)
domΛ-juuu 「同じ種類」(cf. juuu 「種類」)

「違う」という表現は hak.mΛ-であり、これも mΛ-を含んでいる。mΛ-に前置されている hak は、対比談話標識 (contrastive discourse marker) のようにみえる (cf. 伊藤 2014: 67)。

- (5) hak.mΛ-buk 「違う顔」
hak.mΛ-bɔn 「違う集団」
hak.mΛ-juuu 「違う種類」

3.1.4 「たくさん」を意味する「四」

固有語の数詞 pon 「四」を数量句に用いた場合、「たくさん」の意味を普通表し、数量が4 という意味で解釈されることはほとんどない。

- (6) pleʔ pon kloʔ
 実 四 [類]
 「たくさんの実(／4つの実)」

よって、固有語の数詞「四」を数量句に用いた場合、意味が曖昧になる¹²。曖昧さを避けるために、タイ系言語からの借用語を用いるか、日本語で言えば「2つ2つ」のような反復形式に言い換える。この場合は、数量が4であることだけを意味し、「たくさんの」を意味することはない。

- (7) a. pleʔ <sii> kloʔ
 実 四 [類]
 「4つの実」
 b. pleʔ <soŋ> kloʔ <soŋ> kloʔ
 実 二 [類] 二 [類]
 「4つの実(lit. 実2つ2つ)」

固有語の「四」を含む数量句は、他の数詞を用いる数量句と比べ、いくつかの点で特殊である。まず、固有語の「四」を含む数量句は、完了を表す形式 ?a=を取れる¹³。一方で、それ以外の数詞は、固有語と借用語のどちらについても、?a=を取れない。

- (8) a. pleʔ ?a=pon kloʔ
 実 [完]=四 [類]
 「実がたくさんになった。」
 b. *pleʔ ?a=ber kloʔ
 実 [完]=二 [類]
 c. *pleʔ ?a=<soŋ> kloʔ
 実 [完]=二 [類]

さらに、「四」は普通は類別詞として用いない語彙にも付いて「たくさんの」という意味を表す。例えば、「子供」?ay.tak は名詞として用いるのが普通で、類別詞としては用いない、つまり、数詞を前置して数量句を形成することはない。しかし、数詞「四」のみ前置を許し、「たく

¹² Rischel (1995: 126) では、数詞「二」ber が名詞に後続して複数を表す例のあることを報告している。

¹³ アスペクト標識を取れる点において、「四」を含む数量句は動詞的である。ただし、「四」を含む数量句は否定標識を取れない点において、動詞と異なる。伊藤(2014)において、動詞は「否定標識を取りうるもの」と定義している。これに従えば「四」を含む数量句は、少なくとも動詞とは別のカテゴリーに属すると言える。この「四」を含む数量句に近い振る舞いをするものに、「朝」takiʔ, 「昼」kha.tɔn, 「夕」tr.dil などの時間表現がある。これら時間表現は、アスペクト標識をとれるが、否定標識は取れない(?a-takiʔ, *ki=takiʔ)。

さんの子供」を意味する数量句を形成する。「2人の子供」と言うには、必ず名詞、数詞、類別詞と並べる必要がある。

- (9) a. pon ʔay.tak
四 子供
「子供たくさん」
b. *ber ʔay.tak
二 子供
c. ʔay.tak ber mlaʔ
子供 二 [類]
「2人の子供」

この他にも、meʔ「雨」、lam「木」などが「四」と数量句を形成する例が観察されている。

3.1.5 「プラス1」標識

数量句に後置して、数量が数詞よりも1多いことを表す標識が存在する。ここでは、「プラス1」標識と呼ぶことにする。

- (10) pleʔ <soŋ> kloʔ hloy
実 二 [類] プラス1
「実3つ(実2つプラス1)」

数詞「二」を用いた数量句の時に「プラス1」標識が表れやすいという傾向があり、それと並行的して「三」が数量句に使われることはほとんどない(cf. Rischel 1995: 147)。ただし、なぜ「プラス1」標識が用いられるのか、また用いた場合と用いない場合との差異は不明である。

管見の限り、ムラブリ語以外のクム語派に属する言語には「プラス1」標識に対応する形式は存在しない。

3.2 非数量句的用法

非数量句的用法には、人称代名詞、呼びかけ、また親族名称と共に用いる用法がある。

3.2.1 人称代名詞+数詞

ムラブリ語の人称代名詞は一人称と二人称が体系をなし、三人称は二次的な形式である(cf. 伊藤 2013)。体系内の人称代名詞は単数、双数、複数であるが、複数形は双数形に、A変種では数詞の「五」を、B変種では数詞の「八」を後続させることで表す¹⁴。さらにA変種では、

¹⁴ 数詞「五」と数詞「八」は一見関係のないように思える。しかし、数詞「五」が(片手の)指の本数と一致していること、そして数詞「八」tiʔが「手」を意味することを考えると、「五」と「八」が「手」という共通項で繋がっているようにもみえる(cf. Ito & Nimonjiya 2014)。

ムラブリ語の数詞

複数形に「今この場 (here-now)」にいる人のみを指す一人称複数形があり、定冠詞 ʔak 、数詞「二」 ber 、数詞「五」 $\text{t}^{\text{h}}\text{ɣ}\eta$ によって表す。二人称複数にはこのような区別は観察できていない。

表2 A 変種の人称代名詞

| | 単 | 双 | 複 | 複 (here-now) |
|---|----------------------------|--------------|--|--|
| 1 | ʔoh | ʔah | $\text{ʔah}+\text{t}^{\text{h}}\text{ɣ}\eta$ | $\text{ʔak}+\text{ber}+\text{ʔak}+\text{t}^{\text{h}}\text{ɣ}\eta$ |
| 2 | $\text{m}\epsilon\text{h}$ | bah | $\text{bah}+\text{t}^{\text{h}}\text{ɣ}\eta$ | |

表3 B 変種の人称代名詞 (Rischel 1995)

| | 単 | 双 | 複 |
|---|----------------------------|--------------|-------------------------|
| 1 | ʔoh | ʔah | $\text{ʔah}+\text{ti}?$ |
| 2 | $\text{m}\epsilon\text{h}$ | bah | $\text{bah}+\text{ti}?$ |

三人称について、単数は A 変種が数詞「一」を用い、B 変種は定冠詞+数詞「八」を用いる。三人称双数は、A 変種、B 変種ともに定冠詞+数詞「二」を用いる。

表4 三人称単数・双数を表す形式

| | 3 単 | 3 双 |
|---|-------------------------|-------------------------|
| A | $\text{m}\text{əy}$ | $\text{ʔak}+\text{ber}$ |
| B | $\text{ʔat}+\text{ti}?$ | $\text{ʔat}+\text{ber}$ |

三人称複数は、B 変種は定冠詞+数詞「八」で三人称複数を表す。この形式は三人称単数と同形である点に注意されたい。

A 変種の三人称複数形は指示対象が「同じ集団に属するかどうか」によって形式が異なる。話し手と同じ集団に属するが、今この場にはいない人々を指す場合、 $\text{ʔah}+\text{ber}+\text{t}^{\text{h}}\text{ɣ}\eta$ 一人称双数形+数詞「二」+数詞「五」で表す。話し手と別の集団に属し、今この場にはいない人々を指す場合は、 $\text{jum}+\text{p}\Delta?$ 「集団」+遠称の指示詞で表す。

表5 三人称複数を表す形式

| | 3 複 (同集団) | 3 複 (別集団) |
|---|---|------------------------------|
| A | $\text{ʔah}+\text{ber}+\text{t}^{\text{h}}\text{ɣ}\eta$ | $\text{jum}+\text{p}\Delta?$ |
| B | $\text{ʔat}+\text{ti}?$ | |

使い分けについて、参与観察で実際に遭遇した例を、支障のない程度に改変して示す。

(文脈：6人で車に乗って学校に来た。その時、3人はトイレへ行き、もう3人は車に残った。そこへ、学校にもともといたムラブリ(X)が来て、車に残ったムラブリ(Y)に尋ねた。)

- (11) X. bah+t^hɣŋ leh <kii> mla?
 2.[双] 来る いくつ [類]
 「あなたたちは何人で来たのか？」
- Y. <hok> mla?, ʔah+ber+t^hɣŋ jak nɔm
 六 [類], 1.[双]+二+五 行く 尿
 「六人、一緒に来て、今ここにいない彼らは小便に行った。」
- X. jum+nɔʔ jak ʔyak kalɣ?
 集団+[遠] 行く 糞 か
 「彼らは大便だったりして。」

ここではYを含む「車で来た6人」が集団とみなされており、その集団の中にXは含まれていない。トイレに行つてこの場にはいない3人を、「車で来た6人」の集団に含まれるYはʔah+ber+t^hɣŋと呼び、含まれないXはjum+nɔʔと呼んでいる。同集団とみなされる集団は可変であり、場面により異なる。

3.2.2 呼びかけ

数詞ber「二」は、親密さを伴った聞き手への呼びかけとして用いられる¹⁵。呼びかけのberは、単独でイントネーションを担うことなどから、間投詞に分類できる(cf. 伊藤2014: 48)。筆者の資料では、berが呼びかけに用いられるのは、男が男に対して呼びかける場合のみで、男が女に、女が男に、もしくは女が女に呼びかける例はみられなかった。以下に用例を挙げる。

- (12) ber, maʔ luŋ ʔoh
 二 あげる [向] 1.[単]
 「お前、俺にもよこせ。」

その他にも数詞「二」には、ʔi-ber, si-berという呼びかけの用法が観察できる。ʔi-berのʔi-は人の名前や一部の親族名称などに前置されて、敬意を表す¹⁶(ʔi-taʔ「オジイサン、オジサン」 taʔ「祖父、父母の兄」)。si-については、他に用例がなく、また近親の言語にも同源語が見当たらない。

¹⁵ 数詞「二」berの呼びかけ用法は、数詞「二」が「ペア」を想起させる用法であることに起因すると筆者は考えている(cf. Rischel 1995: 147–148, 三人称双数形も参照)。つまり、数詞「二」berによる呼びかけは、話し手と聞き手の間に「ペア」という関係性を立ち上げることで、親密さを演出していると考えられる。ただし、呼びかけに用いられるberが、単に数詞「二」の同音異義語である可能性もある。どちらの分析が妥当であるかは現時点では判断できない。今後の課題とする。

¹⁶ ʔi-はタイ系言語からの借用語と考えられる。しかし、現代のタイ系言語でこの語を用いるのは無礼にあたり、敬意を表すムラブリ語とは反対の意味である。また、B変種でʔi-は若い女性か子供の名前にしか用いない形式であり、A変種の用法と異なる(Rischel 1995: 339)。

ムラブリ語の数詞

?i-ber は、話者によってその用法の説明が異なる。若者の多くは、?i-ber は親密な男女の間でお互いを呼ぶときに用いられると説明する。一方で、老年層の話者は ?i-ber を年上の男に対して呼びかけるのに用いると説明する。si-ber には、このような年代差はなく、年配の女性を呼ぶ場合にのみ用いることができる。

表6 「呼びかけ」の種類と説明の違い

| | 若年 | 老年 |
|--------|-----------|-------|
| ber | (親密な) 二者間 | |
| ?i-ber | 親密な男女間 | 年配の男性 |
| si-ber | 年配の女性 | |

?i-ber に見られる世代間の差が、何を表しているのかを考察することは今後の課題とする。

この他にも、X+「二」 X+「八」という対句的表現が、複数のものへの「呼びかけ」として用いられる。X は名詞であることが多いが、この表現にのみ現れる形式もある。ただし、どんな名詞でもこの表現ができるわけではないようで、例えば「犬」はできない。

表7 対句的表現による「呼びかけ」

| X | X | 二 | X | 八 | |
|----------|-------|-----|------|-----|---------------|
| yoŋ 「男」 | yoŋ | ber | yoŋ | ti? | 「男たち！」 |
| ?uy 「女」 | ?uy | ber | ?uy | ti? | 「女たち！」 |
| km- 不明 | km- | ber | km- | ti? | 「(年下の) お前たち！」 |
| braŋ 「犬」 | *braŋ | ber | braŋ | ti? | 「*犬たち！」 |

3.2.3 親族名称

親族名称の内、「年上キョウダイ」の diŋ と「年下キョウダイ」の roy¹⁷ に数詞「二」 ber を後置させると、「義理の」という意味を付け加えることができる。

- (13) diŋ+ber 「義理の年上キョウダイ」(cf. diŋ 「年上キョウダイ」)
 roy+ber 「義理の年下キョウダイ」(cf. roy 「年下キョウダイ」)

他に、buur という語も diŋ, roy について、「義理の」を意味する。buur と数詞「二」の ber は形が似ているが、その関係は不明である。

¹⁷ より正確には diŋ は「年上キョウダイ」だけでなく、「父母の年上キョウダイの子」も指し、roy は「年下キョウダイ」だけでなく、「父母の年下キョウダイの子」、「年上キョウダイの子」も指す(二文字屋・伊藤 in print)。この内、「義理の」の解釈が加わりうるのは、それぞれ「年上キョウダイ」と「年下キョウダイ」のみである。

4 まとめ

本稿は、ムラブリ語の数詞を数量用法と非数量用法に分けて記述した。それぞれの数詞の用法を表にし、本稿のまとめとする。

表8 ムラブリ語の数詞とその用法

| 数 | Mlabri | 数量詞用法 | 非数量詞用法 |
|---|--------|------------------------|--------------------------------|
| 一 | mɔy | あまり用いない・domɔy か mɔ-を使う | 3.[単] (A) |
| 二 | ber | あまり用いない・タイ語を使う | 3.[双], 呼びかけ, 「義理の」 |
| 三 | pɛʔ | あまり用いない・タイ語を使う | — |
| 四 | pon | 「たくさん」 | — |
| 五 | tʰɔŋ | あまり用いない・タイ語を使う | 1/2.[複] (A) |
| 六 | tal | あまり用いない・タイ語を使う | — |
| 七 | gul | あまり用いない・タイ語を使う | — |
| 八 | tiʔ | あまり用いない・タイ語を使う | 「手」, 1/2/3.[複]・3.[単] (B), 呼びかけ |
| 九 | gaɕ | あまり用いない・タイ語を使う | — |
| 十 | gal | あまり用いない・タイ語を使う | — |

記号・略号

(ピリオド)... 音節境界；=... 接語境界；+... 複合語境界；1... 一人称；2... 二人称；3... 三人称；単... 単数；双... 双数；複... 複数；遠... 遠称；定... 定冠詞；向... 向格；類... 類別詞；完... 完了

参考文献

- Bätscher, Kevin (2015) “Mlabri” In: Mathias Jenny & Paul Sidwell (eds.) *The Handbook of Austroasiatic Languages*, 1003–1030. Leiden, Boston: Brill.
- Bernatzik, Hugo A. (1938) *Die Geister der Gelben Blätter*. München, Bruckmann.
- Chazée, Laurent (2001) *The Mrabri^{sic} in Laos: A World under the Canopy*. Bangkok: White Lotus.
- Diffloth, Gérald & Norman Zide (eds.) (1976) “Austroasiatic Number System” *Linguistics*. 174.
- Egerod, Søren (1982) “An English-Mlabri Basic Vocabulary” *Annual Newsletter of the Scandinavian Institute of Asian Studies* 16: 14–21.
- Egerod, Søren & Jørgen Rischel (1987) “Mlabri-English Vocabulary” *Acta Orientalia* 48: 35–88.
- 伊藤雄馬 (2014) 「ムラブリ語の文法スケッチ」『地球研言語記述論集』6, 41–72.
- 伊藤雄馬・二文字屋脩 (2014) 「改訂版ムラブリ語テキスト」『言語と文明』12, 170–190.
- Ito, Yuma & Shu Nimonjiya (2014) “‘Hand Number’ in Mlabri Numeral Usage”, 20th Himalayan Languages Symposium, July 17, Nanyang University, Singapore.

- Nimmanahaeminda, Kraisi (1963) “The Mrabri^{sic} Language” *Journal of the Siam Society* 51(2): 179-184.
- 二文字屋脩・伊藤雄馬 (in print) 「ムラブリ関係名称再考」『アジア・アフリカ言語文化研究』 9.
- Oota, Hiroyuki et al. (2005) “Recent Origin and Cultural Reversion of a Hunter–Gatherer Group” *PLoS Biology* 3: e71.
- Rischel, Jørgen (1982) “Fieldwork on the Mlabri Language: A Preliminary Sketch of its Phonetics” *Annual Report of the Institute of Phonetics, University of Copenhagen* 16: 247–255.
- Rischel, Jørgen (1995) *Minor Mlabri: A Hunter-gatherer Language of Northern Indochina*. Copenhagen: Museum Tusulanum Press.
- (1997) “Typology and Reconstruction of Numeral System” In: Fisiak, Jacek (ed.) *Linguistic Reconstruction and Typology*, 273–312. Berlin: Mouton de Gruyter.
- (1999) “The dialect of Bernatzik’s (1938) refound?” *Mon-Khmer Studies* 30: 115–122.
- (2007) *Mlabri and Mon-Khmer—Tracing the History of a Hunter-gatherer Language*. Copenhagen: The Royal Danish Academy of Science and Letters.
- Sakamoto, Hinako (2005) *Mlabri Text*. (Endangered Languages of the Pacific Rim A3-17.)
- Shorto, L. Harry (Paul Sidwell, Doug Cooper, Christian Bauer eds.) (2006) *Mon-Khmer Comparative Dictionary*. Canberra: Pacific Linguistics.
- Sidwell, Paul (1999) “The Austroasiatic numerals 1 to 10 from a historical and typological perspective” In: Givozdanovic, Jandranka (ed.) *Numeral Types and Changes Worldwide*, 253–271, Berlin, New York: John Benjamins.
- (2013) Proto-Khmuic. ms. (<http://sealang.net/monkhmer/database/>)
- (2015) “Austroasiatic Classification” In: Mathias Jenny & Paul Sidwell (eds.) *The Handbook of Austroasiatic Languages*, 144–220. Leiden, Boston: Brill.